ひとひらに
建築板金職人が想いを込めた
緋銅（ひどう）のバラ

緋銅の他にも、銅そのものの輝き、鮮やかな緑青、茶褐色の焼き色など多彩なバラを制作。
銅鐸やトンボなど様々な造形のペンダント、ブローチ、ピアスも人気商品

銅には、人を和ませる温もりがある

「このバラは、一体何でできているの？」

奈良県の有限会社リノ・ユニバーサルの美馬ご夫妻が手がける銅製のバラを見たお客様は、つい手に取り感嘆の声を漏らす。花びらの板厚は0・1ミリ。そのひとひらには、丹念な造形と鮮やかな彩色が施されている。緑青の青、焼き入れした茶褐色、そして緋銅の深紅とどれも鮮やかだ。

「緋銅は江戸時代に発明された着色技法ですが、私は完全な我流。まずは酸性の洗剤で銅板をきれいに洗い、水分を拭き取った後、コンロで全体を熱します。その銅板をホウ砂水溶液に浸し、一気にバーナーで炙っていくんです」とご主人の庄一さん。

実演いただくと、ピカピカの銅板が、みるみるうちに味わいある赤色に変化していった。

「機械を使わない手作業ですし、気温や湿度でも色合いは影響されます。でもその曖昧さが味となり、オンリーワンの作品となるんです。銅屋根に陽が当たって輝く光は、なんだか暖かい。建築にもアートにも温もりがある銅は最高の素材です」

（有）リノ・ユニバーサルは、銅屋根や奈良伝統の雨樋「大和式鮟鱇（あんこう）」などを手がける屋根工事業者で、奈良県から重要文化財の修復などの依頼も請けている。そこで使用する銅板を余すことなく活用し、長年使われた銅板は、その鮮やかな緑青を生かして再利用していく。

ホウ砂水溶液に浸した銅板を熱し水で冷やすと、たちまち鮮やかな赤色に

「25歳の頃、当時住んでいた福岡にあった障がい者施設を利用する方々との出会いの中で〝もっと人に喜ばれる仕事がしたい〟と言われた言葉がきっかけでした。その後、奈良県で創業。10周年を機に障がい者の方々と銅板アクセサリーを手がけることにしたのです」と庄一さんは振り返ります。

だが、当時は障がい者が働くことへの社会的認知度は低く、売上が伸びず挫折することに。

「このアートビジネスを軌道に乗せ、もう一度、障がいのある方々と一緒に仕事をしたいですね。また、建築板金の仕事が先細りになっていく今、同じように悩む日本中の同業者の道しるべの一つにもなれたらとも思っています」と庄一さん。

「それには、より多くの方に私たちの作品を知っていただくことが一番です。新しくデザインした商品はいちはやく〝アトリエうーたろう〟のインスタグラムで情報発信。さらにいろいろなイベントに出展して、実物を見て触れてもらうことにより、自然発色の銅板の色合いや風合いも実感いただけています」と奥様のゆきさん。

お二人は、7月にパリで開催されるJapan Expoの準備に大忙し。庄一さんは、日本らしさを表現したいと銅板をへら押しで成形したお面などを、ゆきさんは緋銅をちりばめたアート作品を制作中。コロナ禍の厳しい冬の中、温もりある色とりどりの美しい銅の花々を、世界中に届けようとしている。

有限会社
リノ・ユニバーサル
代表取締役職人
美馬 庄一氏（左）

アトリエ うーたろう
代表
みま ゆき氏（右）